

古代史で広域連携

NPO 法人福岡歴史研究会副理事長 石合 六郎

季刊「古代史ネット」で吉備の古代の謎や課題を積極的に発信させていただいている。その中で吉備だけでは解決できない、あるいはもっと大きな目で見れば、気づくことを実感させられた。

今回の「造山古墳の被葬者を探る（上）」で、安本美典氏が指摘する「三つの相似形古墳（造山古墳、宮崎の女狭穂塚古墳、群馬の天神山古墳）」が築造時期を同じころとすることがわかっただけでなく、それぞれがかなり大きな、ある場合は盟主古墳を超える陪塚（帆立貝形）を持っていることを発見した。すなわち古墳築造文化として、盟主の前方後円墳と帆立貝形陪塚の関係が見えてきたのである。

それについてはこのシリーズ季刊「古代史ネット」の4号での筆者の原稿「吉備の巨大古墳を考える（下）御友別の時代（5世紀）」以来指摘し続けているところだ。今回はそれを深化させる形で論考を進めている。

古墳時代の人にとってはこの関係はだれでも知っていたことだろう。あまりに当たり前のことだったので、古事記や正史の日本書紀などの六国史、その他古典史書のどこにも書かれていない。こんな何でもないことが現代人にとっては貴重な情報といえる。

実は今回の論考（「造山古墳の被葬者…（上）」）にもふれていないことだが、この三つの相似形古墳と同じ時期に活躍した御友別の墓と想定している佐古田堂山古墳（岡山市北区高松地区）にも直径108メートルの帆立貝形古墳・小盛山古墳が付随している。

墳形は円形で、造出がある、したがって帆立貝形ともいえる。墳丘は3段築成で、造出部分は2段築成、直径は95メートル、造出まで含めた墳丘長は108メートル。円墳としては全国第3位の規模になる。結構な古墳である。

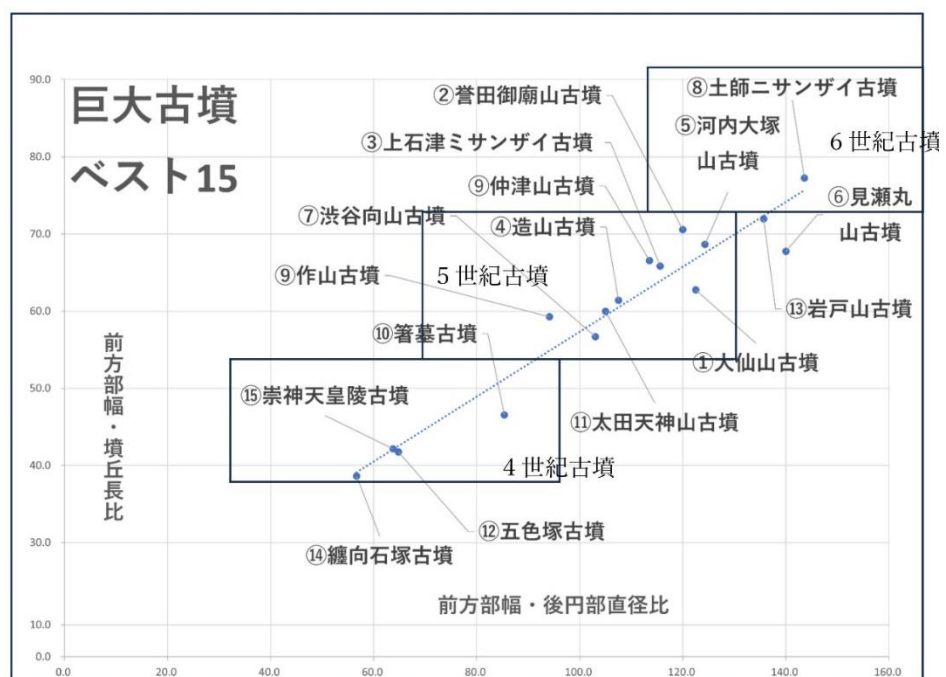
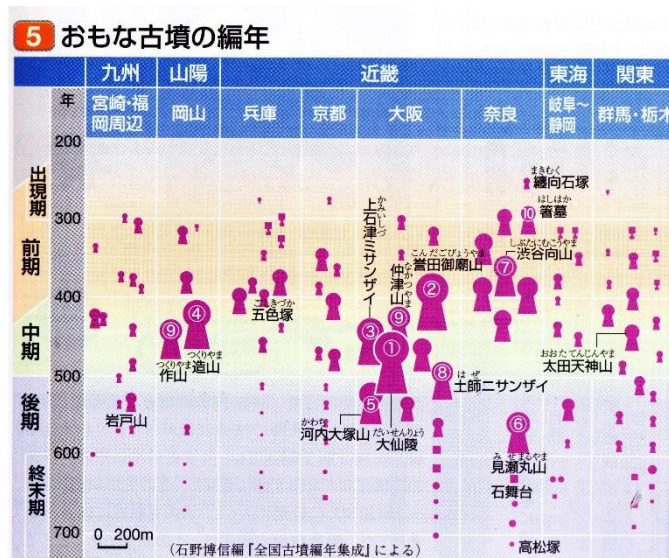
こういう古墳の関係情報は地元の人間にしかわからない。今回の執筆にあたって日本古墳大辞典やその続編を開き、インターネット検索を続けながら関連地域の情報を探しているが、個別の古墳の情報は取れても、たとえばA古墳とB古墳の関係を把握することは難しい。その地域に住んでいればこそ分かるような情報は多いはずだ。

全国の古代史研究家が、そうした視点で地域を見れば、新しい発見があるのではなからうか。

それだけでなく、古墳築造の年代を相対的に分析する方法で、筆者が行っている Excel を活用する方法はとても簡単なので、地域ごとに分布図ができれば、古墳の見方が大きく変わってくるはずだ。

ただ、日本の古代の年代観が統一されていないことは大きな障害だろう。安本美典氏の古代天皇在位10年説は、筆者が古代史を論考する上で、極めて正確な指針となってきた。ところが、文部省の教科書的な年代観に基づけば齟齬が生まれる。今回の論考を進めるにあたって、山川出版（まさに文部省的年代観の本家）の「詳細日本史図録」に古墳の編年表があるとの情報を得て2008年版を購入してみた。

確かに掲載されていた。出版社で独自に作ったものでなく、石野博信氏のものだった。Excel表で生成されるものと大きく異なるのものだった。わたしが作った編年表（全長1位のものから15位までのもの）と石野博信氏の表を見比べてほしい。



2つの表を比べると、白石氏の表（上）は箸墓古墳を三世紀の古墳との思い込みがあるためか、筆者のグラフ（下）とは異なっている。岡山の作山と造山古墳でも、同じ4世紀でも順序が反対になっている。前方部の発達では、造山の方がより新しいはずなのに異なっている。

また、三角縁神獣鏡が出た古墳が不当に古くなるなど問題が多い。それに比べ機械的に振り分けた方が合理的であるようだ。

現実にはこの齟齬^{そご}を克服するためにも、天皇在位10年説の正確さをさらに広めることが必要だろう。逆に言えば、全国でExcelによる古墳編年表を作成し、アカデミズムの編年表を比較していく人が出てくれば、流れが変わってくるかもしれない。徒労に終わる恐れがあっても地道な努力を怠ってはならない。

Excelのフォームがあれば、だれでも活用できるので、ご希望の方にはメールで送りしてもよいと考えている。わたしのメールは ishiai.rokurou@mineo.jp です。ご連絡くだされば対応いたします。